

★日本は移民や帰国民をどう扱ってきたか＝今野久

1971年11歳の時、私は家族と共に日本に生まれました。遡ること17年(1954年)、日本の南米移民政策により、私の両親はブラジルに渡りました。父は和歌山県で生まれ、アマゾンのトメアスーに家族とともに移住し母と出会いました。その入植地は日系人が作った町で、以前はアカラ植民地と呼ばれていました。母は東京生まれで、両親と満州から帰国しました。ブラジル移住前は、茨城県友部にある国民高等学校(農業訓練所)に学んでいました。その学校は、満州に満蒙開拓青少年義勇軍を送り出したことで教職を追放された、加藤完治が設立した学校でした。その後、家族でアマゾンのボアビスタに移住しました。しかし入植地のあまりの酷さのため、逃げ出してトメアスー移動しました。そこで父と結婚しました。

南米移住は(ペルー、ブラジル、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチン)に限らず、「移住」には崇高な理念・理想がありました。「開拓魂」など精神論に偏重し、現実の移住民の立場に立った政策は少なかったと考えます。「移住地の南米に理想郷を創る」など、高い理想を掲げた移民もいたのも事実ですが、高収入を当てにした移民が多かったようです。大半の移民は、移民会社が宣伝した高待遇・高収入を信じて、「一旗揚げたら帰国する」ことを目的とした、出稼ぎでした。単に、南米に働き口を求めるための移民だったのです。家族移民が主であったことも、南米移民の特徴でした。農家の長男は少なく、働き口のない次男三男の家族が主でした。とくに戦後の復興前の日本は、満洲からの引き揚げ者も加わり貧困であえぐ労働者が国中に溢れかえっていました。南米移民政策は、「口減らし」の一環としても行われたと思われまます。

1908年より開始されたブラジル移民は、1914年に一時期、中断されました。その理由は、「移民の定着の悪さ」「経済悪化」でした。しかし第一次大戦前が起これば、ヨーロッパからの移民が途絶えたため、日本移民は再開されます。

それまで移民を送り出す事業は、小規模な数社の民間企業によって行われていました。しかしこの時期を境に、日本政府が移民会社を「海外興業株式会社」設立して、移民の送り出す窓口を一本化しました。母の話によると、移民事業は市町村などの役場で行われたそうです。ブラジルに渡るときには、地域の方々から餞別を貰っていったそうです。

移民同士の両親が知り合って私が生まれました。ところが私が3才のとき、父が亡くなりました。働く主を失った私たち家族は移住地を転々としました。しかし、女手での農業の将来に不安を感じた母は、帰国を決意しました。

アマゾン各地の入植地での生活は、電気ガス水道などのインフラが整備されていなく、気候や自然環境も厳しく、移民にとっては過酷でした。しかしそれ以上に、現地のブラジル人の生活は過酷なものがありました。一番貧しい移民でさえも、ブラジル人よりは豊だったのです。

ところがトメアスーでは、胡椒（ピメント）の栽培が成功し、その値段が空前の高値で売買されるようになりました。そうすると移民の生活は一変します。胡椒の売買で成功した平均的な移民は、トラックやカッサンバ（貨物運搬用自動車）、トラクターを購入できるように豊かになりました。電気がないアマゾン奥地の夜は暗いはずでした。ところが、自家発電機により移民は明るいひと時を過ごすことができました。なかには、移民御殿と呼ばれた豪勢な家を建てる者もありました。ほとんどの移民は、現地のブラジル人を労働者として雇っていました。そして労働者を、雨風がしのげる粗末なバハコンといわれた宿舎に住まわせていました。労働者には常時の雇用者と、胡椒の収穫時期にだけ雇う季節労働者がいました。

入植地で成功していた時期は短く、僅かに5、6年の間でした。それでも移民の年収は、日本のサラリーマンの50倍であったと聞いています。もちろんブラジル人に、労働者として雇われる移民は一人もいませんでした。胡椒の高騰は、インドネシアなどの産地が戦争で疲弊して、胡椒の市場への供給が激減したことによります。第二次世界大戦で被害を被った移民たちが、戦争によって恩恵を受けるとは、皮肉といえます。

開戦当初からブラジルは他の中南米諸国同様に戦争に中立でしたが、アメリカの圧力で連合国側に加わりました。戦争中とはいえ枢軸国であった日本による、ブラジルへの攻撃はありませんでした。だが、ドイツの潜水艦による船舶への攻撃は激しくて、1000名を超える被害者が出ていました。そうした事件から中南米の日系移民は、アメリカの日系移民が受けた、「敵性外国人」と同じ不当な扱いを受けました。戦争でブラジル政府は、アマゾン地域の枢軸国の移民をトメアスーに集め収容しました。その理由は、当時のト

メアスーにはまだ道路なく、陸の孤島で川船でしか行き来できなかったからです。

「敵性外国人」の扱いをされた移民は、財産没収や公共の場で母国語を話すこと、三人以上の移民が集まること、母国の国旗を掲げること、母国語の新聞や出版物の発行の禁止を強制されました。現在ブラジル移民は、当時の移民への扱いは不当であったとして、ブラジル政府に謝罪を求めて運動を展開しています。こうしたトメアスー植民地の成功を、角田房子氏が「アマゾンの詩」という小説に描きました。またブラジル移民70周年には、この植民地テーマとしたドラマが民放で放送されました。そんな成功者の一人、山田一氏（はじめ）を仲代達也が演じていました。残念だったのは、ブラジルの公用語はポルトガル語ですが、スペイン語で放送されていたことでした。

移民の現地人に対する人種差別意識には、心が痛みました。現地人の生活はとても貧しく、移民にはブラジル人に対して優越意識があったのでしょう。移民は彼らブラジル人を蔑み、「毛糖」や「外人」と呼んで馬鹿にしていました。日系移民による運動会での出来事は忘れられません。日本では、運動会はどこの学校でも行われますが、ブラジルの学校ではなかったのです。運動会はブラジル人の生徒も参加ができ、日系の生徒の家族が見学に来ていました。そこで移民の生徒たちは、親が持ってきた豪華な食べ物にありつけました。そこに、ブラジル人の少女が食べ物をねだってきたのでした。相当お腹すいていたのでしょう。もちろん私たちは、彼女に食べ物を分けてあげました。後で思ったのですが、その少女にしてみれば赤の他人に食べ物をねだるのは、大変な屈辱であったと思いました。

友人の家に遊びに行ったときの事です。私のブラジル名は「アントニオ」といいますので、友人が「アントニオ君を連れてきた」と彼の母親に伝えました。すると家の中から、「ダメじゃない、ブラジル人と遊んじゃー・・・」と、母親の声が聞こえてきました。またあるとき、私がブラジル人の労働者と遊んでいると、「ウチの子は、労働者なんかとは遊ばないけどね」と嫌味をいわれました。移民が互いの結束が固いのは良いことです。ですが民族意識が強すぎて、排他的になるのは困りました。移民の家族が日系以外の現地人と付き合い結婚しようとする、たいがい親族に反対されました。事実、叔父が黒人と結婚しましたが、私自身、当時は結婚に賛成はできませんでした。入植地では、友人はすべて日系でしたし、ほとんどの友人と日本語で話していました。入植地は「ブ

ラジルの中の日本」であったのです。

日本に来て間もなく、社会主義的政策をすすめていたチリのジェンデ政権が武力で転覆されたことは、衝撃でした。子供ながら私は政治に関心があったのです。チリークーデターの背景は詳しく知りませんでした。大人になってからは当時よりは、多くの事を知りました。ブラジルの独裁政権については当時、ブラジルに居ましたが、当たり前のことと思っておりました。選挙がないことも同じです。ただ、そうした中でもメーデーが行われていた記憶があります。

ブラジルに居た従妹が日本に一時帰国しました。そのときに聞いたのは、私が子供のころ、1960年代当時のことだそうですが、「ヒサシはまだ子供だったから知らないと思うけど、キューバ革命の後、サンパウロでも都市ゲリラの激しい武力闘争を展開された・・・」と聞かされました。子ども頃、NHKの通信高校教育講座で、チリのアジェンデ政権が放送されていました。番組では大土地所有制度を改革して、土地なき農民に土地を分け与えたアジェンデ政権の功績が今でも残っていることを、好意的に放映されていました。

成人した私は、労働組合など政治的な活動をはじめました。言葉は家庭では日本語を使っていましたので、ほとんど苦労はしませんでした。漢字には苦労しました。教科書も日本のように国語、算数、理科と別れていなくて、すべての教科が一冊の本にまとめられていました。国語という教科もなく、それに相当するのは、「ポルトガル語」でした。学校の先生に大きな裁量が与えられていて、時間割はありませんでした。ブラジルでの自由な雰囲気のある教育を私は好きでした。だから、画一的な日本の授業は窮屈で慣れるのに苦労しました。日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯員会（以下、アール）と出会うことになるのは、ニカラグアでサンデニスタ政権が誕生した頃でした。横浜でアールに入り、米国が中南米を支配する政策である「進歩のための同盟」等や、国際情勢について知りました。

さてブラジルは、奴隷が廃止されるまで労働力を黒人奴隷に依存していました。何故、労働力を先民インデオに依存しなかったかといえば、①インデオ自体がヨーロッパ人によって持ち込まれた、天然痘や結核、風邪などの病原菌によってほとんどが絶滅された。②自給自足的な生活を営んでいたインデオが、黒人と比べて怠け者であり、過酷な肉体

労働に耐えきれなかったことなどが原因だったと聞かされていきました。しかし1888年に最終的には年奴隷制度が廃止されたことにより、替わりの労働力を欧米に求めました。しかし奴隷同然の移民は過酷すぎるとして暴動が起きて、イタリアはブラジル移民を禁止しました。そうしたことから「スト破り」とも解釈できる、日本移民が開始されました。

そもそも移民の原則は「水が高いより低きに流れる」のように、「貧しいところから、豊かなところに」移動することにあります。しかし南米移民は、その原則に反して行われました。貧しい日本から、それよりも賃金が高く豊かなアメリカへ移住するのが、移民の原則なのです。元々ブラジル移民以前は、ハワイやアメリカ本国への移民が移住の主流でした。ところが勤勉な日本移民はアメリカ人の職を奪うとして、日本移民の排斥運動が高まりました。こうした世相を反映してアメリカ政府も日本移民を制限します。そこでカナダとオーストラリアが移民先として有望視されました。ところが両国とも、アメリカに習って移民に制限を設けました。

ともあれブラジルは労働力不足に困り、1892年に日本移民を受け入れることを、表明しました。しかしこの時期はまだ、両国には正式な外交関係が結ばれていませんでした。ようやく1885年に、日伯友好通商航海条約が締結され、1897年にはリオ・デ・ジャネーロに日本公使館が設けられました。これで両国間には、移民受け入れの法的な素地ができあがりました。ところが外務省が先に記述した、イタリア移民暴動の事件を理由に、ブラジル移民に躊躇しました。それに追い打ちをかけるような、以下の事件が起りました。1897年8月、「吉佐移民会社」が神戸港から正式な1500人の移民を、「土佐丸」で送り出す準備を終えていました。ところが突如、出港直前にブラジルのブラド・ジョルダン商会から、受け入れを中止される事件がありました。こうしたこともあり、日本政府はブラジルへの移民を許可しなくなりました。

さて1905年、日露戦争に勝利したものの日本は賠償金が得られず、国内は経済的に疲弊していました。そうした状況は、おのずと海外に活路を見出し、海外移民の希望者を増やしました。同年には、杉村公使がブラジルに赴任しました。同公使は同国政府閣僚から移民の実施を打診されたこともあり、同国の移住予定地であったサンパウロを視察しました。そして、早期の移民の実施を本国の本省に打診しました。他方で、移民会社で

あった「皇国植民会社」の役員の水野龍氏は、1907年ブラジルに赴きサンパウロ州政府との間で「1908年以降3000人の移民を送り出す」旨の契約を結びました。

こうして曲折はあったものの、ブラジル大統領・アフォンソ・ペナの下、1908年4月28日に笠戸丸によって781人の移民は、ブラジルのサントス港に向いました。しかし彼ら移民を待ち受けていた待遇は、移民会社が謳っていた条件とは（高待遇・高賃金）とは異なっていました。彼ら移民は、法律上の地位こそ自由市民であったが、実生活は奴隷と大差のないものでした。待遇の悪さや賃金の低さは、イタリア移民と同様でした。そのためコーヒー農園ではストライキが多発して、農園を逃げ出す者も多く現れました。

中南米では1970年代から80年代にかけて米国の後押しをうけた支配勢力が軍事独裁政権を打ち立てて左翼や人民弾圧をおこないました。日本移民もその犠牲になっています。ブラジルではとくに被害は明らかになっていませんが、アルゼンチンの軍政では（日本）移民の失踪事件が起こっております。しかし日本政府は救援の施策をとっていません。よく中東などの有事で、「邦人救出」と称して自衛隊の出動が検討されます。ですが、本気で邦人の救出を願っているのかどうか。日本政府が真剣に迫害された日本人の救済に動いた事実を聞いたことがありません。

思えば満州にしても、戦後のドミニカ移民（農地に適さない土地に移民させた）や情勢不安定の軍事政権の国に国民を送り込んだ、日本の移民政策はすべて棄民政策であり誤りだったのではないのでしょうか。悪いことに、日本はこの移民政策について国民に正しく知らせていません。政府の移民政策を実証的に研究した資料は少なく、その問題を批判した文献も少なく、若槻泰雄氏の『外務省が消した日本人』が、移民政策を批判した唯一の書物です。

現代、かつてのような国策としての移民奨励は終わり、「南米移民」という言葉は死語になりつつあります。しかし移民の子孫が、逆移民（定住を含めて約20万人）として日本にやってきて、地域の構成員になっています。しかし文化や言葉の障害の他、家族の崩壊や子供の登校拒否、行方不明、孤独死の問題が起こっています。孤独死では引き取り手のない五遺体ほどが、ブラジル大使館に一時的に安置されている状況です。また東南アジアや中国からの移民も増えています。

自国の移民（日本人）さえも大切にできない国が、異なる人種や民族の移民を大切にできるはずもなく、不安でなりません。移民史を学べば、その国の政府の移民を含めたすべての国民の扱い方が見えてきます。だからこそ日本AALAとしても移民史の学習会に取り組んで頂きたいと思っています。移民や外国人労働者の扱いこそ日本国民の自由と権利の到達点の反映であり、国際連帯の重要な側面だと考えるからです。

（了）